

絹きぬのの変へん容よう

篠田しのだ節子せつこ

集英社

絹きぬのへん変容よう

篠しの田だ節せつ子こ

絹きぬの変容へんよう

一九九一年 一月二五日 第一刷発行

著者 篠田節子しのだ せつこ

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五・一〇
郵便番号 一〇一・五〇

編集部 (〇三) 三二三〇一六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三二三〇一六三九三

製作課 (〇三) 三二三〇一六〇八〇

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えます。
本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

絹の変容

春たった。

四十年前の戦災で焼け残った土蔵の内部は、意外に乾いていた。開けはなった窓から、桜のはなひらか、舞い込んでくる。

長谷康貴は、さきほどから桐箱の一つに腰を下ろして、大きさ四十センチ四方ほどの一枚の絹布に見入っていた。

古びて危うい手さわりのする絹はすすけて、とうにしほは伸びきっていた。しかしその表面にうつすらと虹色の光が漂っているのか、薄暗い土蔵の中にも認められた。布を持つ手を動かす度に、浮き上がった光は、その色合いを微妙に変化させた。

「すこい、まるで、レーザーディスクた」

康貴は、唾を飲み込んだ。

七色の光の帯は、時には、布から二、三センチも浮き上がって見えた。染色による効果でない織りの加減か、あるいは、特殊な糸を使ったものた。薄明かりの中に、燦爛と輝く白無垢の打ち掛けのイメーシか、彼の心を捉えたのは、この瞬間だった。

二十九歳になったはかりの康貴は、長谷包帯工業の二代目として経理を担当するかたわら、絹織物の開発をもくろんでいる。

「俺の家は、もともと包帯屋なんかじゃない」というのか、彼の口癖である。

「長谷包帯」の工場と事務所は敷地の中央にある。しかし、康貴がそこにいることは稀だった。数年前、多額の借金をして建てたその鉄筋四階建てのビルに、康貴はいまだになじめないのた。

事務所の裏手にある油の匂いか染みついた木造建物、手入れの悪い灌木や、二、三本の桜の木に囲まれて建っている今は使われていない織物工場、そこか彼の落ち着き場所だった。

むかし、目にもあやな絹布を織り出していた織機はどうにないか、建物だけは、取り壊されることもなく残っている。すきま風の入るその二階に、康貴はわざわざ書斎を構えていた。

土蔵は、さらにその奥にあつて、数代前、この家か、京都を凌ぐといわれるほどの高級品を織り出した頃の名残の品々を収めていた。

都心から、四十キロ離れ、どちらかというと地方都市の面影を備えた街、八王子か、織物で栄えていたというのは、もう昔語りになっている。

十数年前のドルシヨノクをきっかけに始まった深刻な繊維不況で、この町の織物業は壊滅的な打撃を受けた。ほとんどの業者が倒産した中で、長谷の家が商売を続けられたのは、目先のきく彼の父か、いち早く反物を織るのをやめて、商品を木綿の包帯に切り替えたから。それにしても、役にもたない織物工場を取り壊さすに残しておいたのは、父にも美しい絹織物でもっていた時代へのわずかな未練か、あつたからかもしれない。やかましい織機の間から織り出されてくるりんすの白絹や、染め上かつたゆうせんの華やかな色合いに憧れを抱いたのは、しかし、それらの物を幼い記憶にとどめていた康貴の方だった。伸縮性包帯やサポーターの開発に取り組みながら、彼にはいつか八王子の「長谷」のフラントで、絹の最高級の反物を送り出したいという夢があった。土蔵の中で発見した一枚の絹布は、彼の漠然とした野心を急速に現実的なものにしていった。

康貴は絹をたたんで小脇にかかえると、土蔵を出た。外気に触れて、虹色の光沢かと思ってしまうような気がして、しっかりと両手で包みこんだ。

事務所にいた父親は、興奮気味の康貴の顔と虹色の光を放つ布を見比へなから、少し驚いたように言った。

「うちで織ったものではないな。はあさんの嫁入り道具だろう。何の役に立つというわけでもないが、あの村では、嫁く娘にこんな布切れを持たせてよこしたんだ。御守り札のようなものだろう。養蚕で保っていた村だから」

父は、ひび割れのてきた指の腹に布を挟んで、丁寧にこすった。長年、織物をやってきた者が、品定めをするときの無意識の動作である。

「変わった糸らしい。野蚕糸かもしれんな」

野蚕糸とは、山野で、かしわやくぬきなどを食へて育つ半野生の蚕をいう。生産効率は極端に悪く、品質も家蚕絹に比べれば、劣るか、山繭のように独特の風合いから珍重される例もある。

「手触りは、山繭の様とか……」

康貴は首をひねった。

「しかし、それなら、薄緑色をしているはずだ。天蚕絹のような野蚕糸なら、茶色か普通だし、こんな七色に光る絹など初めてだ。いま、絹は第二のフームだから、うまくいけば売れるかも知れない」

二代目のことはに、父は、「もう、絹織物をやってる時代じゃないさ」と、ほろにかい笑いを浮かべて首を振った。

翌日から康貴は、虹色の絹の素性を調べ始めた。しかし養蚕に関するあらゆる資料を調べても、虹色の糸に関する記述はなかった。京都から取り寄せた、膨大な量のサンプルにもなかった。過去に織られたという記録さえないのた。

祖母の実家をあたるしかない、康貴はそのときそう思った。翌週の日曜日、さっそく祖母の故郷に向かった。

思いつくといてもたつてもいられず、即、実行に移すというのは、八王子のたんな衆の気質である。同時にいささかあきつぱいところかあつて、地道な努力が苦手で、結局大したことはできないというのも、昔から言われていることである。

いまさら「たんな」ていられるはずもないのたか、康貴はどちらかというと苦労人の父親に似ず、派手好きで遊び人であったと伝えられる祖父の気性を継いでいた。そういえば、ほっそりした頬も薄く整った唇も、全体的にとことなく意志薄弱な印象を与える容貌は、セピア色の肖像写真にある祖父の若い頃の面影をそのまま映していた。

「山梨の人間は、稼きもんだ」

という祖父の口癖のとおり、働き者であることをかわれて、祖母は、ここの家に嫁いた。

笛吹川上流の山村から、女工として連れてこられた彼女を、祖父の母親が見初めたのだ。嫁いた後も、いままでの女工の生活と変わりなく、子供を背中にくくりつけて、朝から晩まで工場て機を織り、末っ子を学校に上げた年、結核で、あっけなく死んだという。

織りの流行や相場に敏感で、一儲けしたと思えば、田町の遊廓にくりこんで一夜で金を使い果たす。そんな八王子のたんな衆を助け、やかて追い抜いていったのは、このように辛抱強く、つましい山梨から来た女工や職人たちであつた。

祖母の故郷は、塩山市の外れにある。いや、あつたというへきたらう。集落は、すいふん前にダムの底に沈んだのである。

康貴は中央高速の甲府インターを下りて、谷川添いの曲がりくねつた道を二時間ほど走つた。やかて道は小さな人工湖に行きあたつた。康貴は湖の淵で車からおりた。

水位が下かつている。康貴は、ガードレールに片手をかけて、瘦せた身体を精一杯乗り出して湖底を覗き込んだ。巨大な立ち木かゆらゆらとゆらめいて見えた。祖母の故郷、かつてわすかはかりの幻の布を織り出した村は、今、深緑の水面のはるか下方に、畔道の姿もそのままにしんと静まりかえっている。

水面に目をこらすうちに、康貴は祖母の故郷を訪ねれはどうにかなると思つた自分の見込みが、とうやら甘かつたらしいと気がついた。絹布は、糸か、織りに謎を秘めたまま、

緑の水の底に沈ってしまったのだ。

その時代にはおそらく謎でも何てもなかったのか、無念だった。

飽きっぽいはずの康貴か、休日ごとにダムのはとりに足を運んだのは、あの虹色に輝く布のイメージか、彼の内でさらに膨らみ、商売気を抜きにしてもなお、その美しさだけで、彼の心をとらえてしまったからかもしれない。謎を秘めたところか、さらに諦めきれない気持ちにさせていた。

ひょんなことから、不思議な絹布の正体かわかったのは、翌年の三月のことである。康貴か土蔵でそれを目にしてから十か月あまりだった。ダムに足を運ぶのも、十数回を超えらる頃だった。

ダムにかかる吊り橋の近くに、ひしゃけたような土産物屋があった。ドライブの車かときおり通る休日だけ、ほこりっぽい棚にコーラの缶など並べて商売しているという。何度も通ううちに、そこのはあさんと顔見知りになっていた。

あるとき、世間話をしているうちに、はあさんは、康貴を機屋の息子と知ると、奇妙な物を出してきて見せたのだ。

「おきぬ様と言ってたな」

それは、十体ほどの人形だった。人形といっても、粗末な着物を着た長さ十センチほどの筒状のもので、手足も、髪もない。どれもこれも黒すみ薄汚れて、康貴は、いくらか不気味な感じさえ抱いた。よくみると、そののっぺらぼうの顔は、繭でできていて、

「絹織物をやっているところじゃ、これを大事にしていたもんだ。よかったら、持っていないなさい。汚くなったのほど、よく働いたおきぬ様だから」

そう言われても、康貴は手を出しかねていた。

ふと、黒すんたのっぺらぼうの顔の一つに目を留めた。彼は、あつと声を上げたまま、視線をその表面にくきつけにした。かさかさに乾いて手垢のついたその表面に、うっすらと、目をこらさなければ見落とすほどの、こく淡い虹色の光が宿っていたのだ。

「これは」

彼は、その人形をとりあげ、はあさんの老眼鏡の鼻つらに持っていた。

はあさんは、しばらく意味がわからなかったようだが、やかて、その繭の光に気づいた。「それか。あたらしいうちは、きれいな物でな、昔は、よく嫁ぐ娘にその山繭を持たせたものたか」

「山繭？」

「そう、狐塚の鎮守の森に付く虫でな、普通のお蚕さんと違って、きれいな色をしていた

て」

「て、それは、どこです？」

康貴は、咳きこむように尋ねた。はあさんは、社の方向を指差した。

「境内の木に、ふらさかるんだ。梅雨の頃になると。でも、とりなさんな。よそののか取ると祟られるから」

「ああ」

「昔、きれいだったっていうんで、おもしろ半分に取った者かいたか、その晩のうちに苦しみだして、死んでしまったと」

よくある話だと、康貴は苦笑した。

「少し前に、ハイキングにきた若い衆が取ったときには、手が腫れたそうた」

おおかた間違えて、マツケムシにても手を出したのたろう。

「これに着物を織ったら、えらい豪華たろうな……」

彼は、夢でも見ているように言った。

「なにを」

はあさんは、笑った。

「反物を織れるほいたら大変た。山じゅうの繭を集めたところで、ハンケチ一枚か、い

いところたな」

境内の木、社……。

二分後には、彼の車はあさんの指差した山の斜面に向かって突っ走っていた。

まもなく舗装道路は切れた。車を止めて、彼は細い林道を歩き始めた。息をきらしながら、二十分も登った頃、北斜面のじめじめとした林のなかに、荒れ果てた社が現れた。村か湖底に沈んだのと同時に、この社も打ち捨てられたものらしい。

真っ黒に腐った柱と傾いた屋根、それと鳥居の生々しい朱のコントラストが異様である。ふいに、康貴は、はあさんの言っていた「祟り」を思い出して背中かそくりとした。下草の生い繁った林は、木々かてんてに枝をのはしていて、その虫か、との木にふら下かるのかは、見当もつかなかった。しかも、山は、ようやく新芽かふいたはかりて、幼虫の姿も見えない。

陽の当たらぬ荒れ果てた鎮守の森の気味悪さに、康貴は早々に退散した。

東京に戻って来た康貴は、普段の口の軽さに似合わず、社の木々にふらさかるといふ虫の話をつれにも話さなかった。別に、秘密にしておこうとしたわけではない。もうじき三十になろうという男の話題にしては、いささか夢想的すぎるような氣かして氣恥すかし

ったのだ。

町の商売家の二代目の集まりがあった夜、したたかに酔っぱらっていたせいもあるう、山繭のことをしゃへってしまった。二代目たちの間では、織物と言うといかにも時代遅れという空気があつて、未だに織維をやっているというたけてなんとなく肩身が狭い。山繭に関する康貴の話などともに聞いている者はいなかった。

「こいつ美大なんか出ちゃってるからさ、言うことか、ロマンチノクなんだよな」
たれか言った。

康貴は、一瞬、酔いにまかせてしゃへってしまったことを後悔した。

そのとき、やけにしっかりした声かした。

「いや、一発当てれば、てかいかもしれんぞ」

康貴は、驚いて振り返った。大野だった。大野か、三十代ですてに薄くなりかけた頭を振り振り、鼻の頭に汗の粒を浮かへて、康貴の話を聞いていた。

父親の代で傾きかけた家業をあれよと言ふ間に復興させた男。いや、先代の傾きかけた織物業を織維不況か本格化する前に、やかて来る壊滅的打撃を見越して無理矢理に手を引かせた。

女工や、職人たちに「うちか、本当に倒れてからしゃ、あんたたちは行き場か本当にな

くなるんだ」と言つて暇を出したのは、彼が、また大学を出たはかりの頃だ。

取り壊した工場跡に当時としてはめずらしい駐車場つきのスーパーマーケットを作った。女工たちの独身寮を取り壊したあとには、マンションを建てた。やかつて、市内の織物業者かはたはたと倒産した頃、大野の家は、市内でも、一、二を争う資産家になっていた。

「そろそろ、絹もいいかもしれないぞ。それも、普通のじゃなくって、そういううちよつと変わったやつだ。食い物屋もそろそろ曲がり角たしな」

大野は、肉付きのいいピンク色の手てテーブルを叩いた。その拍子にすり切れた袖口の奥で、ローレノクスかきりと光った。金策のうまさど、見通しの確かさ、いさとなると一步も引かない押し強さ。燦爛と輝く虹色の絹の秘めた夢に、これほどふさわしくない男はいなかった。康貴は、アルコールてしびれた頭で、大野のほつてりと頬のふくらんだ赤ら顔をぼんやりと見つめていた。

つぎに社を訪ねたのは、その年の七月のはじめのことだった。

蚕か繭を作る頃を見計らつて、足場の悪い山道を歩いてた。風が止んで、暑気が足元からはいあかつてくるようだ。さらりと横に流した前髪か、汗を含んで目に落ちてくる。康貴はいらいらしながら、片手で何度も髪をかきあける。